根室農業改良普及センター　地域の概要

1　根室の自然

（1）地勢と自然

根室管内は北海道の最東端に位置し、東部はオホーツク海、南部は太平洋に面し、面積は約8,534k㎡（北方四島を含む）で、全道の１割を占めてる。

北部には、千島火山帯に属する知床半島の突端から摩周岳までの山々が連なり、その南には、根釧台地と称される標高20～80mの広大な波状台地が広がっている。ここに西別川・標津川など多くの河川が流れ、さけ・ますを育むとともに、豊かな漁場を形成する源ともなっており、数多くの野生動物の格好の生息地となる豊かな自然環境も残されている。

（2）気象

管内の気象は沿岸部では海洋性気候、内陸部では大陸性気候を示し、年平均気温５～７℃と年間を通じて冷涼である。夏期間は海霧の影響を受けるなど冷涼寡照、冬期間は積雪は少ないものの土壌凍結が著しく、他地域に比べ農耕期間に大きな制約がある。

表１　農耕期間（５～９月）の気象

	積算温度（℃）	夏日日数（日）	日照時間（hr）	降水量（mm）
根室市	1991	7.4	701	602
別海町	2117	19.9	672	663
中標津町	2135	20.9	648	671
札幌市	2752	49.1	883	439

（アメダス平年値より算出）

2　根室の産業構造

根室管内の就業者数は約43,000人、うち農業への従事者は約5,500名、13%を占めており、漁業従事者12%とほぼ同等となっている。

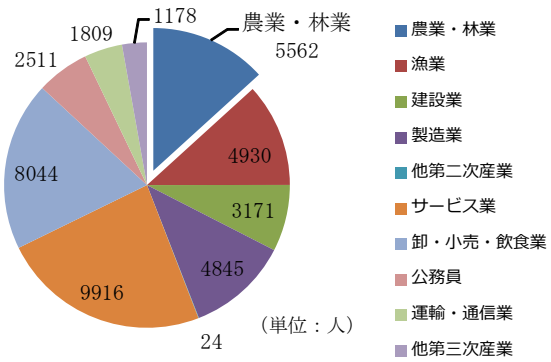

図１　就業者の産業別割合（H22国勢調査、15歳以上）

55%を占める第三次産業のなかには、５ＪＡ、農業関係連合会、農業機械・資材メーカー、牛乳運送業者などの事業体も多く、製造業においても５カ所の乳業工場、建設業のコントラクタへの参入等、農業は根室の地域経済を支える大きな柱となっている。

3　根室農業の歴史

（1）戦前

・明治２年に開拓使根室出張所が設置され、松本十郎判官が移民百余名が入植。

・明治19～22年、和田屯田兵村に440戸が入植し、穀物栽培と馬産を開始。

・度重なる冷害凶作から主畜農業、さらには乳牛飼養への転換が図られ、昭和21年まで

には６カ所に乳業工場が設置された。

（２）戦後

・戦後緊急入植により、昭和39年までに3,500戸余が入植。その後、多くの離農があった。

・根釧パイロットファーム：昭和31～39年の間に、約5,000haが開墾され、約360戸が別海町に入植。

・新酪農村建設事業：昭和48～58年にかけて、根室市・別海町・中標津町の区域で行われ、約15,000haの農地造成と合計約200戸の入植・移転・整備が行われた。

・これら急速な規模拡大の陰では、多額の負債、畜産物価格の低迷など、酪農を取り巻く環境の急激な変動にさらされることともなった。

・昭和58年からの酪農負債整理対策から始まる再建対策を乗り越え、機械化、施設整備、支援システムの整備を進め、大規模酪農経営は安定の方向に向かいつつある。

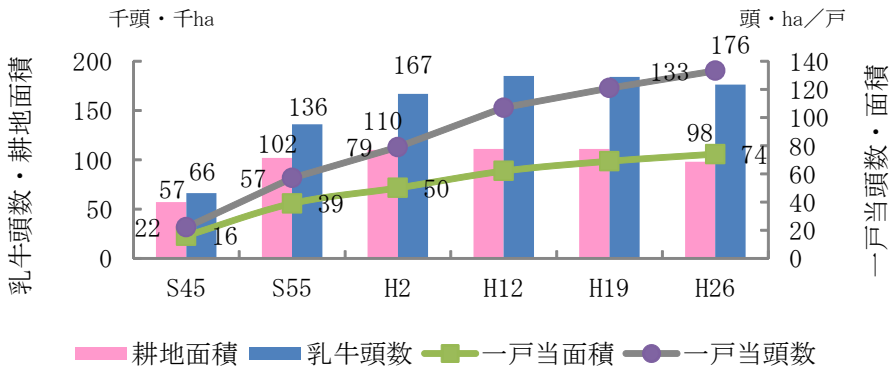

図２　耕地面積・乳牛飼養頭数の推移

（農業構造動態調査・畜産統計、H26は根室の農業（飼料作物の作付面積、乳牛飼養頭数、飼養戸数より算出））

４　根室農業の生産構造

（１）農家戸数

平成27年の農家戸数は約1,300戸であり、農家戸数は年々減少している。一方、規模拡大は、飼料等生産資材の高騰や生乳需給の不透明感などを背景に鈍化の傾向にある。

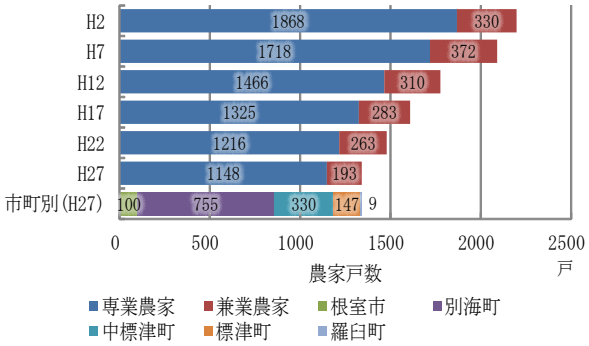

図３　根室管内の農家戸数

農林業センサス（根室の農業より）

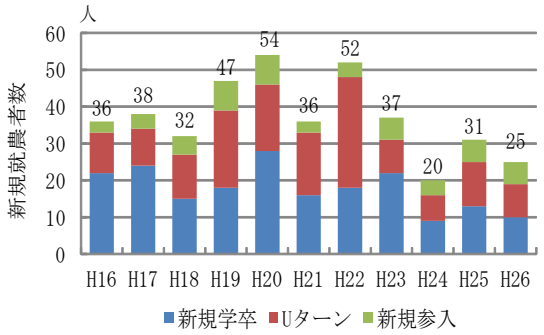

図４　新規就農者数の推移

（普及センター調べ）

平成18年時点の後継者のいる農家割合は32％に止まり、将来の地域農業を支える担い手の育成・確保は重要な課題となっている。

新規就農者は、これまで年間30～40名程度で推移しており、新規参入者の継続的な確保やUターン就農の増加が、管内の特徴となっている。

（２）酪農の生産構造

平成26年における根室管内の生乳出荷戸数は1,233戸、年間出荷乳量は777千ｔ、全道シェアでは、戸数で20％、出荷乳量で21％を占めている。酪農家一戸当たり出荷乳量は635ｔとなっている。

一方、生乳出荷戸数の減少は、依然として続いており、全道における年間減少率３％に対し、管内では２％の減少率となっている。生乳出荷戸数は減少しているが、管内の生乳生産量を維持している状況にある。

管内には、雇用労働を活用した大型法人経営及びフリーストール・ミルキングパーラー方式導入による経営が約30％ある。年間800t以上を出荷するこの階層は、規模拡大指向が強く、管内における生乳生産の40～45％を占めている。

一方、放牧を活用した低コスト経営、戸別完結型経営など、特色ある小・中規模経営も約70％を占めており、管内では多様な酪農経営が営まれている。

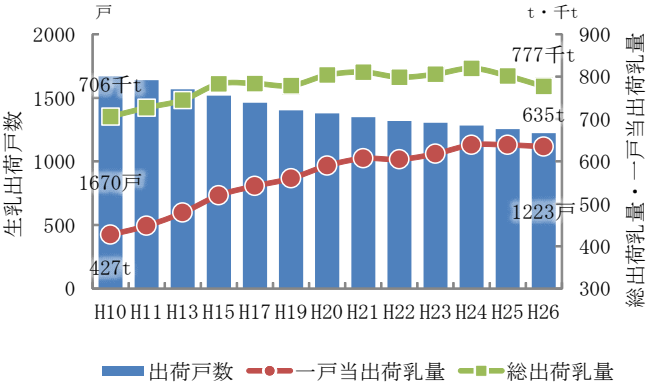

図５　生乳出荷戸数と出荷乳量の推移

（クミカン年度12-11月：ホクレン調べ）

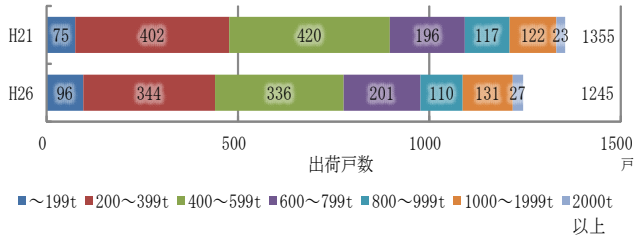

図６　乳量階層別酪農家戸数（4-3月：ホクレン調べ）

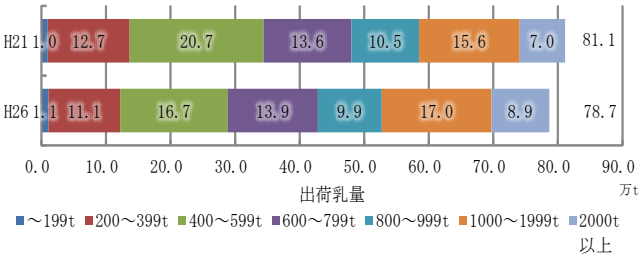

図７　乳量階層別生乳出荷数量（4-3月：ホクレン調べ）

酪農経営の支援組織として、コントラクター・ほ育育成預託・ＴＭＲセンター等の整備と活用が進められている。とくにＴＭＲセンターは、現在12組織が稼働し、現在も検討を進めている地区がある。

（３）耕種経営の生産構造

中標津町内の畑作経営は、ばれいしょ・てんさいに加え、近年では冷涼な気候を活かした、だいこん・ブロッコリーを導入した畑作野菜の複合経営への転換を図りながら、経営の安定化を推進している。

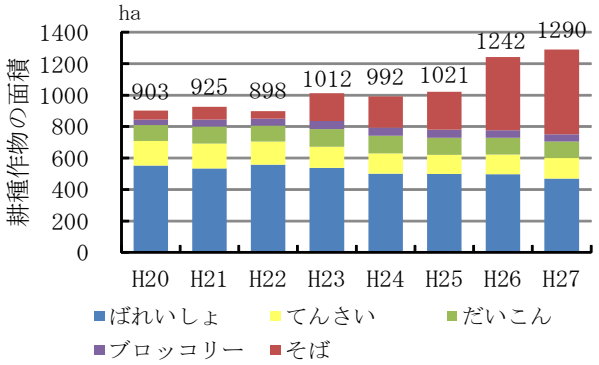

図８　耕種作物面積

（根室振興局調べ）

5　根室管内の市と町の紹介

人口(H27.1)
5,621人

町名の由来	アイヌ語「ラウシ」（獣の骨のある所）から転訛
世界遺産「知床」の玄関口に位置する羅臼町、前浜に豊かな漁場を持つ漁期の町である。ヒカリゴケ・熊の湯温泉など、観光資源にも恵まれ、流氷の訪れとともにオジロワシ・オオワシの飛来する地でもある。	
見　　所	世界遺産「知床」、羅臼岳・国後島が一望「知床峠」、マッカウス洞窟「ヒカリゴケ」、原始林に抱かれた「熊の湯温泉」
特　産　品	羅臼昆布、鮭・ほっけ・タラ・ウニ等の海産物、海洋深層水を使用した製品

人口(H27.1)
5,430人

町名の由来	アイヌ語「シベツ」（鮭のいる所又は大川の意）から転訛
豊かな海と大地を活かした漁業と酪農を基幹産業とする標津町、最近では豊かな自然や産業を活用した滞在・体験型観光を展開する「エコツーリズム事業」を推進し、多くの観光客が訪れている。	
見　　所	感動・体験「標津町エコ・ツーリズム」、鮭の水族館「サーモンパーク」、「ポー川史跡自然公園」
特　産　品	鮭（標津あきあじまつり９月下旬）、鮭加工品（鮭トバ、イクラ等）、ホタテ、標津羊羹

人口(H27.1)
24,210人

町名の由来	標津川の中流域に集落が形成されたことに由来
根室管内の空の玄関口である中標津町、市街地は管内の一大商業地を形成しているが、一歩郊外に出ると牧草地とばれいしょ畑が広がり、どこまでもまっすぐに伸びた道路は「ミルクロード」とも呼ばれる酪農・農業の町でもある。	
見　　所	地球が丸く見える「開陽台」、北海道遺産「格子状防風林」、清流に抱かれた「養老牛温泉」
特　産　品	乳製品（中標津ゴーダチーズ、ケフィアオーレ他）、ばれいしょ（じゃがいも伯爵まつり９月上旬）、ミルキーラーメン

人口(H27.1)
15,640人

町名の由来	アイヌ語「ベツ・カイエ」（川の折れ曲がっている）から転訛
乳牛・肉牛で12万頭を数え、酪農生産日本一を誇る大型酪農地帯の別海町、丘陵地帯に広がる牧歌的景観と、オホーツク海が抱く豊かな水産資源、野付風蓮道立自然公園など、豊かな自然に恵まれた町である。	
見　　所	ラムサール条約登録湿地「野付半島・野付湾・風蓮湖」、北海道遺産「野付半島と打瀬舟」、新酪農村展望台
特　産　品	別海乳業公社乳製品、北海シマエビ（えびまつり６月下旬）、鮭、ホタテ、ジャンボホタテバーガー

人口(H27.1)
28,043人

市名の由来	アイヌ語「ニムオロ」（樹木の繁茂する所）から転訛
太平洋とオホーツク海に面した根室市、豊かな水産資源を背景に、古くから北方漁業の基地として発展してきた。納沙布岬から間近に見える北方領土の返還運動の原点の地でもある。半島部から基部まで、酪農場も点在している。	
見　　所	本土最東端「納沙布岬」、ラムサール条約登録湿地「風蓮湖・春国岱」、花咲灯台車石
特　産　品	花咲ガニ（根室かに祭り９月上旬）、さんま（根室さんま祭り９月下旬）、さんまロール寿司、オランダせんべい、地酒 北の勝